

◎編集部の都合でおくられましたことをおわびいたします(いそいでおくばりください)



永井先生の お話しのあらまし

およそ家庭において、一番の関心事であらねばならぬ。昔から子は宝といふが、その財産が大きく立派に成長するからか、かかつたつきあひで、実にさまざま、それでいて絶対欠くことのできない問題、幼少期のうぬぬ日常の生活のすべり、夫婦生活のすべり、三才児の大脳の発育は八〇パーセント位まで、六才ではほとんど完成するといふ。幼児期における日本人の育児は言葉のつとく、子供だからといって別格扱いで甘やかす。その結果非常にわがままとなる、少青年期になつても何事も大人に頼り、自主性のない人間になつてしまふ。又せつなく良いしつけをしよふと思つても、それが身につかないうちに周囲がかわつてしまふ。つまり基本的習慣がでないうちにま

わりでその非をつみとつてしまふ。それは今までの社会の教育と家庭教育のむじゆんと公私の道徳のアンバランス(不均衡)のためである。日本人は、個人の生活は立派だが、公的な道徳観念はゼロに近い。このアンバランスは家庭生活が正常に行われていないからである。例へば一家の柱である主人が亡くなったような場合など、家庭生活の激変から、今までがまさ勝手に育つて来た子供が、急に切りかたつてしまふ。子供は親に對していろいろなおねだりをし、それが、そんな場合決して要求どおりのわがままをさせないで、まわりまわさせざる。目的を達成するために、困難と苦勞が伴ふことは、困難と苦勞が伴ふこととを幼い時から経験させることがたいせつである。しかし、ここに母親の暖かい愛情を添へることを忘れてはならない。次に、これまでの家庭像はどうであつたか。嫁と姑の關係、夫婦、親子の關係は、何時でも多くの場合、嫁だけが唯一の犠牲者であつた。嫁はだんだんから自分の命を殺した生き方をすることになり、胸の中が不満という袋を帯びてゐるのだ。こうした精神では明るい家庭など考えられぬ。ここで姑も嫁の身になつて考え、嫁もまた長い間生活のオアシスとして、お互いにいたわり合ふ年寄りが、それが若く見守り、邪魔せず、老人も自ら逃避的にならず、若者

話し合いの記録

二月二十四日午前 六六回
婦人講座で行われた話し合いは、家庭内人間関係、お互いというテーマであり、時間が少ないため、いずれも古足らずの感があるが、今後の話し合いのいづくにしたい。

第一分科会

- (1) 何でか話に望むこと
- (2) お互いの座をまががわす
- (3) やはり姑は嫁の座より上でありたい
- (4) 家風に早くなじんでほしい
- (5) 会合より帰つたら軽く挨拶を云つてほしい
- (6) 「嫁から姑に望むこと」
- (7) 嫁を信じてほしい
- (8) 料理講習を受けた場合どんな御馳走か、つくづくうれしく云われれば嬉しい
- (9) 自分の夫の背中はお互い

に流してあげるようにしたい。どうしようか。講義のこと話しても、い返事をしてくれないお姑さんもあるが、きいてくださるもの。話し合いの記録

第二分科会

- (1) 若い者から老人にのぞむこと
- (2) 耳の遠いお年よりはひがみをおこさないで下さい
- (3) 昔(明治時代)のことなどいわれると子供達が嫌う
- (4) 若いものから老人にしてあげたいこと
- (5) 嫁とやってあげたい
- (6) 好意は、受けてほしい



第三分科会

- (1) 夫から妻にのぞむこと
- (2) 外の仕事の不調にある時、動かし力になつてほしい
- (3) 無理せず自分の体を大事にしたい
- (4) 愛情の表現を上手にしてほしい
- (5) 日常の言葉づかいに愛情をもつてほしい
- (6) 集會等で聞いた話は、聞かせてもらいたい
- (7) 一妻から夫にのぞむこと
- (8) 家庭内に於ける妻の仕事を理解してもらいたい
- (9) 帰宅時間を決めてほしい
- (10) 姑の前の話しの承口を出してほしい
- (11) 職業的な話題ばかりでなく、もつと視野を広げてほしい

遠きをいとわぬ向学心

梅の花咲く季節を迎え、日本もだいに暖かくなつてきた。昨年三月四日デンマークに到着して一か月の月日が過ぎ去り、数々の思い出を残しつつ、もう一か月後は帰途につくことになりました。二月十五日学校祭がありました。これには日本では考えられない催しです。まず十五日の土曜日、生徒一人が一人づつお客を呼ぶことになってゐるのです。生徒はたいして恋人か許婚者を持つてゐるので、その人たちを呼ぶのです。そして、

ぼくのゆめ

三十年後の国
見町(一)
穴戸 物兵衛
われわれは常に夢を描き、それはかない期待を寄せて日夜生きているのである。たとえそれが実現しなくても、ああ、あれは夢だったとあきらめられる。この世に生を受けて、大きな夢に命を賭けて伸びてゐる。灌木施設が完備して、スプリングクラークから噴き出す霧は、七色の虹を描いてゐる。高い所からケールが、赤く高い山にたどり着く。赤く高い山にたどり着く。赤く高い山にたどり着く。

ぼくのゆめ

三十年後の国
見町(一)
穴戸 物兵衛
われわれは常に夢を描き、それはかない期待を寄せて日夜生きているのである。たとえそれが実現しなくても、ああ、あれは夢だったとあきらめられる。この世に生を受けて、大きな夢に命を賭けて伸びてゐる。灌木施設が完備して、スプリングクラークから噴き出す霧は、七色の虹を描いてゐる。高い所からケールが、赤く高い山にたどり着く。赤く高い山にたどり着く。赤く高い山にたどり着く。